

# バイオスティミュラント活用による脱炭素地域づくり協議会 (Eco-LAB)の活動紹介

2025年2月3日

※無断転載転用禁止



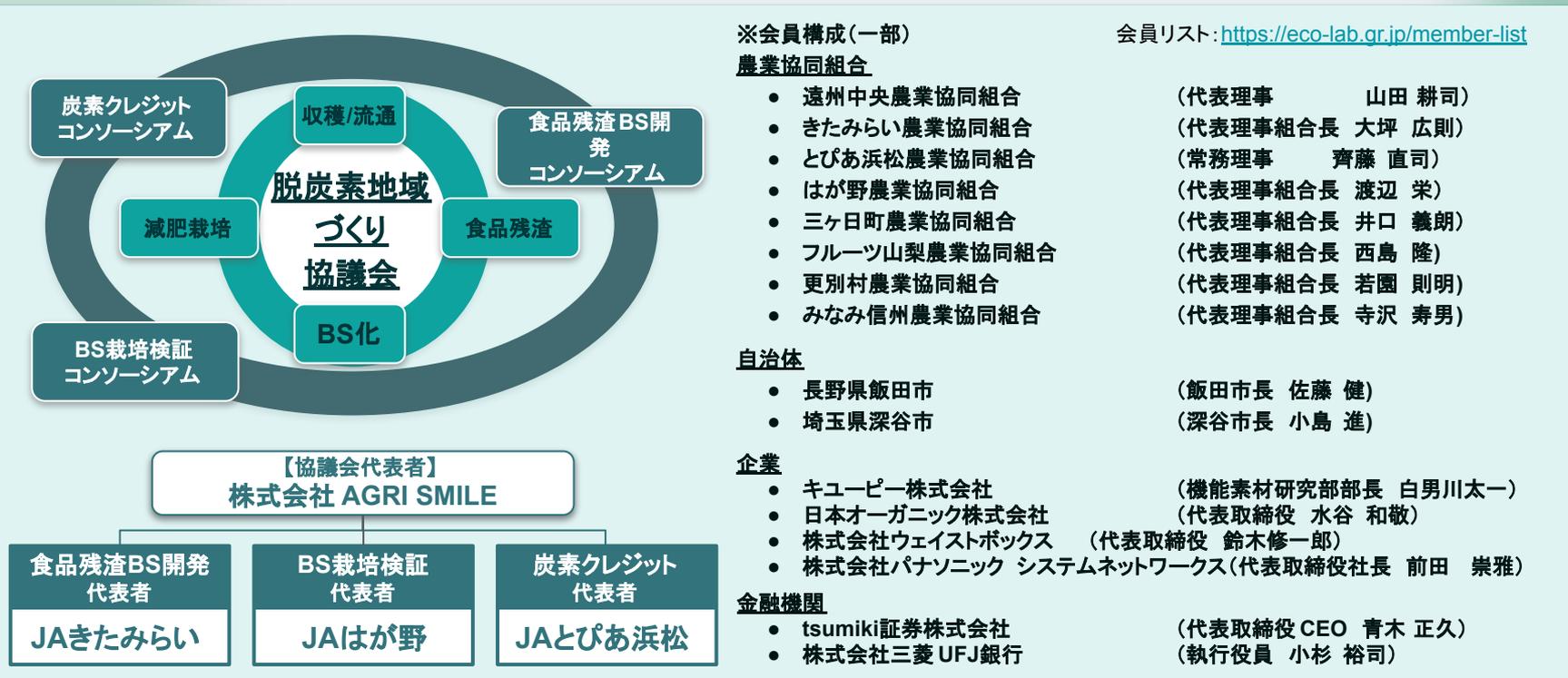
# バイオスティミュラント活用による脱炭素地域づくり協議会

- ❑ 2023年9月、バイオスティミュラントの推進活動を目的とする協議会を設立しました。
- ❑ Expert COuncil for Low carbon Agriculture in Biostimulant technology (Eco-LAB)



# Eco-LABの活動

- 協議会は3つのコンソーシアムで構成し、BS開発・BS検証における産地課題の取りまとめや、炭素クレジットの仕組み作りに向けて、協議を行っています。



# Eco-LABの設立背景 | 生産現場の悩み

- BSの市場成長により、商品の種類も増えてきました。生産現場では、効果を示す使用方法が特定できず、効果の再現性がみられない課題も発生しています。

## 産地の声 (JA様・生産者様)

- 様々な資材がある中で、正しい使い方が定義されていなかったり、やってみたりしたけど効果が見えにくかったりで不安を抱えている生産者も多い。
- BSは過去利用したことがあるが、効果があったような・なかったような。理由をメーカーに問い合わせてもわからない。
- 栽培設計をするために、作用や使用方法を知りたい。
  - 根拠データが、収量の結果だけでは、どのタイミングで BSを使用すべきかわからない。
  - 再現性のあるデータを提供してほしい。
- 効果のある条件だけでなく、効果がでない条件を知りたい。

# Eco-LABの方針 | 『成分ではなく効果』

- 欧米諸国で定義されているように、BS効果は、原料・成分からは判断できないため、製造後の製品に「BS機能はあるか・その効果はどの程度か」などの評価が必要と考えています。



BS効果は、原料が同じでも加工方法により効果・機能・程度は異なる

欧米諸国では、「成分ではなく効果」の証明が必要とされている

# BSに対する認識

□ BSに対する認識は以下のとおりです。

- 欧米では「成分ではなく効果」の証明が必要とされている
  - 原料が同じであっても、BSの効果を発揮しないものも存在する
  - 肥料成分(N,P,K)を添加することで、BS効果が減少するものもある
- 環境ストレスごとにBS資材が存在する
  - 熱対策のBSと乾燥対策のBSは、同時に適用して両者の効果を得ることは難しい
- BSの効果は定量的なデータで評価できる
  - 量的形質・・・地上部重量、根部重量、バイオマス量、収量など
  - 栄養吸収・・・植物体の元素解析など
  - 植物体内で起こる反応・・・遺伝子発現解析、代謝物解析、生化学解析など
- 農薬は直接的に植物の生理機能に作用して増進・抑制する。一方で、BSは、植物に刺激を与えるのみ。植物自身が、その刺激をうけて、生理機能を活性化する。
- 微生物を原料とする場合は、農作物・人への安全性を評価すべき